

「さくらのうた」が早くも聞こえてくるかのような、暖かな春の光に包まれる中、知道会の稲葉会長、奨学会の石川会長をはじめとするご来賓、保護者の皆様をお迎えして、このように盛大に卒業式を挙行できますこと、大変ありがたく、心より御礼申し上げます。

まずは281名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

また、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。

ただ今、卒業証書を授与しましたが、卒業証書といっても、物質的には、ただの紙であり、化学分析しても特殊な成分は何も検出されないでしょう。しかし、精神的には、本校をめざして頑張っていた日々を含めた、皆さんの汗と涙の結晶であり、まさしく「堅忍力行」の証。と同時に、皆さんを励まし、支えて続けてくれた家族や友人、先生たちの思いもこもった、かけがえのない特別な一枚です。

ここで、「卒業」の「卒」の字を思い浮かべてください。真ん中に、人がふたり並んでいるでしょう。皆さんが今日、卒業までたどり着くことができたのは、ともに歩み、寄り添ってくれる人がいたからこそ。その意味で、卒業証書は、単独で受けるものではなく、支えてくださった方々と共同で受けるものだとして理解してください。

そして、普段はなかなか素直に伝えてこれなかった感謝の言葉を、卒業式の今日こそは、そばで支えてくださった方々に、真っ正面から伝えてください。

このような「卒」の字と同じような意味合いを感じさせるモニュメントが、校内に二つあります。

一つ目のモニュメントは、毎年春に、その前で皆さんが集合写真を撮ってきた銅像です。ロータリーにある「わが道をゆく」の像です。これは、日本を代表する彫刻家、能島征二先生の作品です。「わが道をゆく」と名づけられてはいますが、一人ではなく、男女が二人、並んで歩いています。この像は、お互いに支え合いながら長い道のりを歩き切った、「歩く会」のゴールシーンを表したものです。

今日、最後に下校する際に改めて確認してほしいのですが、二人は手のひらと、腕と腕とで、2種類のVサインを作っています。各自が手のひらで作ったVサインは、自己に打ち克った「内面の勝利」を、二人が腕と腕とで作ったVサインは、同志と共に成し遂げた「連帯の勝利」を表している。そのように私は解釈しています。

本校での皆さんの歩みは、決して楽なものではなかったでしょう。和みよりも悩みを、ゆとりよりも焦りを、感動よりも葛藤を、青春よりも制約を感じる時間の方が長かったかもしれません。

それでも、自己の弱さと戦いながら、また個性豊かな仲間たちと切磋琢磨しながら、卒業というゴールまで歩き切った、281名全員の健闘を讃えます。

二つ目のモニュメントは、皆さんが毎日くぐってきた、薬医門です。薬医門というのは、門の構造の一種です。簡単にいえば、横に並んだ二本の本柱を、背後の控え柱が支えることで、より大きな屋根をかけることを可能する、そのような構造の門のことを薬医門といいます。

東大の赤門も、構造的には同じ薬医門です。しかし、本校の薬医門は、本郷の薬医門よりも200年以上も長い歴史を誇る門です。本校のシンボルとして目に焼き付けるとともに、何か大きなことを成し遂げるには、そして長きにわたって自立し続けるには、ともに支え合う「柱」の存在が不可欠であるということを、忘れないでください。

最後に、学校行事の思い出として一つだけ、昨年7月、バングラデシュから来校され、「ここは母国と同じくらい暑い、ここはリトルダッカだ」と言われながら、まさにこの体育館で講演してくださった、ノーベル平和賞受賞者ムハマド・ユヌス博士の言葉を改めて紹介したいと思います。

「成功と失敗は、天と地のように、かけ離れたもののように思うでしょう。しかし、実際には、成功と失敗は、コインの表と裏のようなもの。とても近くにある。なので、失敗を恐れなくてください。失敗は、失望ではなく、学習です。最初に失敗することは、むしろ幸運なことです。最初にたまたま得られた成功は、頑丈な成功ではありません。最初に失敗して、そこから弱点を洗い出し、それらを修正して再びチャレンジすることによって、当初思い描いた以上の大きな成功を収めることができるでしょう。失敗は、人生の貴重な一部です。失敗と成功を重ねながら、前に進み続けてください。」

皆さんのこれからの長きにわたる人生が、失敗を恐れず、答えがまだ銀河にもない自己や社会の課題に挑み続け、学び多き、実り多きものとなることを心より願って、式辞いたします。

令和6年3月15日 校長 御厩 祐司